

がん看護専門看護師教育課程への進学を促すための要因 —構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling:SEM)による検討—

和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究所
がん看護専門看護師コース
山田 忍 准教授

1

がん医療の現状

- ◆第3期がん対策推進計画では、がんゲノム医療やがんとの共生などの個別性の高い医療の提供を目標としている。
- ◆がん医療の均てん化を進めるため高度化しているがん医療に対応できる人材育成が求められている。
- ◆がんプロフェッショナル養成基盤推進プランにより、がん看護専門看護師の育成が促進され登録者数が大幅に伸びている(吉岡・岩脇, 2018)。
- ◆各都道府県においてもがん対策基本法に基づき、がん対策を推進する条例を制定している。

2

A県におけるがん看護専門看護師の現状

- ◆がん看護専門看護師登録者数は881人(2021.1月現在)
- ◆A県には現在5人で全国ワースト2位(昨年3位)
- 都道府県がん診療連携拠点病院: 1
(がんゲノム医療連携病院)
- 地域がん診療連携拠点病院: 5
- がん診療連携推進病院3



都道府県条例によりがん治療を充実させるための施設は整備されている。
がんゲノム医療中核拠点病院との連携による先進医療なども始まっている。

しかし、これらの医療を適切に提供するための人材が不足している。

3

大学院への進学を阻害する要因とサポートニーズについて

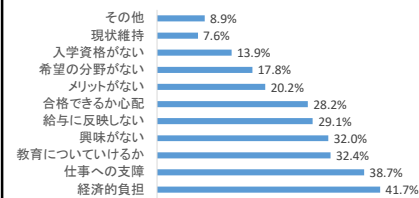


図1 大学院進学を躊躇する理由 (n=618)
(神田・藤本・菊地他, 2015)

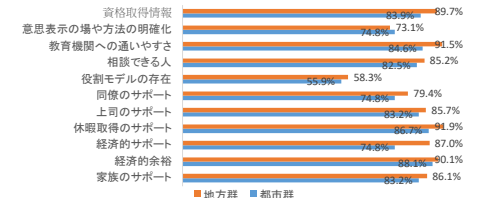


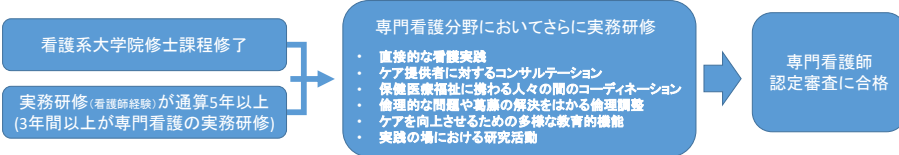
図2 資格・学位取得に必要なと考える事項 (n=366)
(神田・門間・中井他, 2015)

- ◆大学院への進学に関する不安には学費などの費用や収入の減少といった経済的理由や、退職・休職の必要性、再就職への不安や、家庭との両立が困難などがある(澤井・野島・田中, 2004)(近藤・渋谷・坂井他, 2005)(小澤・坂江・坂間他, 2009)(五十嵐・小沼・遠藤他, 2001)。
- ◆「再就職が難しい」、「子どもが小さい」、「経済的に難しい」、「立場上の問題がある」、「臨床で働きたい」といった進学を阻害する因子は逆にそれらを整備することで進学を促進する因子になりうる(澤井・野島・田中, 2004)。
- ⇒大学院への進学を希望する者は学業と就業の両立を望む者が多く、進学に関する様々な不安要素が両立の希望をより困難なものとしていられる。

4

がん看護専門看護師教育課程におけるニーズ

がん看護専門看護師認定の流れ



- ◆ 医療施設での認知、活動環境の改善という活動のための周囲の理解や臨床経験を得るための調整が必要(中村・臼井・松田他, 2011)。
- ◆ 専門看護師コース進学のための手当の支給や身分保障(眞嶋・楠・渡邊, 2012)。
⇒実際の進学後の生活や、職場からの支援体制の有無とそれらが認知されていないことや、卒後の待遇や身分保障などが影響している。

5

研究目的

◆目的

臨床看護師のキャリアアップにおけるがん看護専門看護師教育課程への進学を促すための要因を明らかにする。
要因間の関係性をパス図を作成し明らかにする。

6

研究方法と対象

- ◆ 研究実施期間: 倫理審査委員会の承認後から2021年1月。
- ◆ 調査期間: 2020年5月から8月末。
- ◆ 研究対象者 和歌山県内にあるがん診療連携拠点病院とがん診療連携推進病院9施設に就業し、看護師としての実務経験年数が通算5年以上の看護師。
除外基準
 - ①看護師実務経験年数が5年未満である者。
 - ②看護師資格を持たない者。

7

データ収集方法

1. 各施設の看護部長等の看護管理者に、電話で研究の趣旨を説明し、研究協力の同意を得た。
2. 研究協力の同意が得られた施設に郵送で看護師の人数分の研究趣旨を記載した研究協力依頼文と調査票および返信用封筒を送付した。
3. 研究協力者への研究協力依頼文一式の配付は、各施設に依頼した。調査票の回収は、同封した返信用封筒によって行った。
4. 各研究協力者の研究協力の同意は、調査票に参加意思を確認する項目を作成し行った。

8

調査票の設計

- ◆用語の定義を軸に文献検討から概念を構成している要因を取り上げた。
- ◆がん看護専門看護師教育課程への進学がしやすい環境を測定するために、文献検討によって要因を構成する項目を挙げ、質問項目を作成した。文献は医学中央雑誌より2009年から2019年10月までを対象に、「大学院修士課程」「ニーズ」「キャリア形成」等のキーワードから検索した。
- ◆検索した研究から、大学院進学のニーズや看護師のキャリア形成を含むと思われるものを参考に調査項目は吟味した。
- ◆調査項目は、指導教員や院生によって繰り返し内容を検討した。
- ◆研究対象者が空き時間に回答できるよう、調査票への記入に要する時間が20分程度になるようにした。

9

調査票の設計

- ◆回答は、「あてはまる:4点」、「どちらかといえばあてはまる:3点」、「どちらかといえばあてはまらない:2点」、「あてはまらない:1点」の4件法とした。
- ◆個人属性「性別」、「年齢」、「配偶者の有無」、「育児の必要な子どもの有無」、「介護の必要な家族の有無」、「看護師実務経験年数」、「役職」、「所属部署」、「勤務形態」、「最終卒業養成機関」、「がん看護専門看護師との協働経験」、「がん看護専門看護師との教育的な企画をした経験」、「がん看護専門看護師主催の企画への参加」、「所有している認定看護師資格」の14項目とした。
- ◆要因:文献検討により74項目からなる質問項目を作成した。

10

分析方法

- ◆探索的因子分析(主因子法,Promax回転)
 - 因子の抽出には、因子負荷量が高くなるようpromax回転を用い、データが反映されるようにした。
 - 因子数は、スクリープロットと固有値の減衰状況の推移を確認しながら決定した。
 - 因子の決定は、因子負荷量だけでなく、項目の内容の文献検討やスーパーバイズを受けながら行った。
- ◆個人属性の配偶者の有無、育児の必要な子どもの有無、介護の必要な家族の有無、役職、最終卒業養成機関、がん看護専門看護師との協働経験の有無、がん看護専門看護師と共に活動した経験に関する3項目の各項目について各項目と抽出した因子の因子得点で検定を行った。(個人の得点の計算では、より個人の特性を反映するため、尺度得点でなく独自性(特殊性と測定誤差)から独立した個人の因子得点(芝, 1979;thorstone, 1947)を算出する方法を用いた)。
- ◆分析にはSPSSver.27を使用する。

11

倫理的配慮

- 研究対象者には、以下のことを文書で説明を行った。
- ◆研究の趣旨と研究への参加は自由意思であること。
 - ◆いつでも研究への参加は取り下げることが可能であること。
 - ◆研究へ不参加の場合にも不利益を被らないこと。
 - ◆匿名性を保持するためデータは数字で処理し、個人名を特定することはないこと。
 - ◆データは研究発表や論文発表以外には使用しないこと。
 - ◆研究への同意は、調査票に参加意思を確認する項目を作成して行う。
 - ◆回収した調査票は研究室の鍵のかかる場所で保管し、データはパスワード付きのファイルで管理する。
- 本研究は和歌山県立医科大学の倫理審査委員会の承認を得てから開始した。(受付番号:2830)

12

結果

- ◆研究協力の同意は和歌山県内のがん診療連携病院およびがん診療推進拠点病院の8施設から得られた。
- ◆調査対象者1915人のうち、700人から回答(回収率35.90%)があった。有効回答は542であった。有効回答率:27.36%。
- ◆回答者の個人属性
 - 平均年齢:41.04 (±8.74)歳
 - 性別 男性:53人(9.78%), 女性489人(90.22%)
 - 平均看護師実務経験年数:17.72 (±8.35)年

13

結果

表1 属性		表2 業務内容	
		n	%
配偶者	いる	301	55.54
	いない	241	44.46
育児が必要な子ども	いる	230	42.44
	いない	310	57.20
介護が必要な家族	無回答	2	0.40
	いる	77	14.21
	いない	462	85.24
	無回答	3	0.60

	n	%		
役職	看護部長または同等の役職	2	0.37	
	副看護部長または同等の役職	4	0.74	
	看護師長または同等の役職	32	5.90	
	副看護師長または同等の役職	79	14.58	
	役職なし	425	78.41	
主に活動している部署	緩和ケア病棟	14	2.58	
	外来化学療法室	14	2.58	
	がん相談室	2	0.37	
	がん患者の占める割合が50%以上の病棟	78	14.39	
	がん患者の占める割合が50%以下の病棟	161	29.70	
	その他	264	48.71	
	無回答	9	1.66	
	主に行っている勤務形態	3交代勤務	155	28.60
		2交代勤務	195	35.98
		日勤	178	32.84
夜勤		3	0.55	
その他		11	2.03	

14

結果

表3 養成機関と資格		表4 がん看護専門看護師と共に活動した経験				
	n	%	n			
最終卒業養成機関	高等学校専攻科 (5年課程)	11	2.03			
	専門学校	438	80.81			
	4年制大学	54	9.96			
	短期大学	28	5.17			
	大学院修士課程	9	1.66			
取得している認定看護師資格	大学院博士課程	1	0.18			
	無回答	1	0.18			
取得なし	516	95.20	がん看護専門看護師との協働経験	あり	133	24.54
救急看護	3	0.55		なし	409	75.46
皮膚・排泄ケア	2	0.37	がん看護専門看護師との教育的な企画をした経験	あり	23	4.24
緩和ケア	4	0.74		なし	517	95.39
がん化学療法	2	0.37	がん看護専門看護師の主催する企画への参加	あり	184	33.95
がん性疼痛看護	2	0.37		なし	356	65.68
感染管理	3	0.55		無回答	2	0.37
不妊症治療	1	0.18				
新生児集中ケア	2	0.37				
手術看護	2	0.37				
摂食・嚥下障害看護	2	0.37				
認知症看護	2	0.37				
慢性心不全	1	0.18				

15

結果

- 「がん看護専門看護師教育課程への進学に関連する要因」74項目について
- ◆主因子法(Promax回転)による探索的因子分析を行った。
 - ◆因子数はスクリープロットを参考にしながら、固有値の減衰状況(15.66, 7.98, 4.09, 2.84, 2.39, 1.96, 1.65, 1.57, 1.46)から8とした。
 - ◆この8因子での因子累積寄与率は47.87%であった。

16

第1因子「がん患者と家族への関わりでのみ得られる特別な経験」

項目	因子負荷量
終末期にあるがん患者の家族への対応で困った経験がある	0.93
終末期にあるがん患者への対応で困った経験がある	0.92
予告知を受けたがん患者への対応で困った経験がある	0.82
がん患者へのオピオイドの使用で困った経験がある	0.81
がん患者の疼痛以外の身体症状に対するケアで困った経験がある	0.81
病名告知を受けたがん患者への対応で困った経験がある	0.80
がん患者の退院支援で困った経験がある	0.80
がん患者から死の話題が出たときの対応に困ったことがある	0.79
がん患者の家族から死の話題が出たときの対応に困ったことがある	0.79
がん患者へのがん薬物療法で困った経験がある	0.76
がん患者の疼痛コントロールで困った経験がある	0.73
がん患者からケアについて感謝された経験がある	0.73
がん患者の看取りの経験がある	0.72
がん患者の遺族ケアで困った経験がある	0.67
がん患者の家族からケアについて感謝された経験がある	0.63
がん患者への放射線療法で困った経験がある	0.59
がん患者の手術療法で困った経験がある	0.56

17

第1因子「がん患者と家族への関わりでのみ得られる特別な経験」

▶項目数17, 因子負荷量0.93~0.56

項目	因子負荷量
終末期にあるがん患者の家族への対応で困った経験がある	0.93
終末期にあるがん患者への対応で困った経験がある	0.92
予告知を受けたがん患者への対応で困った経験がある	0.82
がん患者へのオピオイドの使用で困った経験がある	0.81
がん患者の疼痛以外の身体症状に対するケアで困った経験がある	0.81
病名告知を受けたがん患者への対応で困った経験がある	0.80
がん患者の退院支援で困った経験がある	0.80
がん患者から死の話題が出たときの対応に困ったことがある	0.79
がん患者の家族から死の話題が出たときの対応に困ったことがある	0.79
がん患者へのがん薬物療法で困った経験がある	0.76
がん患者の疼痛コントロールで困った経験がある	0.73
がん患者からケアについて感謝された経験がある	0.73
がん患者の看取りの経験がある	0.72
がん患者の遺族ケアで困った経験がある	0.67
がん患者の家族からケアについて感謝された経験がある	0.63
がん患者への放射線療法で困った経験がある	0.59
がん患者の手術療法で困った経験がある	0.56

18

第2因子「自身の将来に対して抱いている明確なキャリアビジョン」

▶項目数9, 因子負荷量0.92~0.67

項目	因子負荷量
がん看護専門看護師教育課程修了後、専門技術を活かした看護を行いたい	0.92
がん看護専門看護師教育課程修了後、チーム専従となり病院内で横断的に活動したい	0.90
がん看護専門看護師教育課程修了後、専門知識を活かした看護を行いたい	0.89
がん看護専門看護師教育課程修了後、専門知識を基盤に多職種と連携したい	0.87
がん看護専門看護師教育課程修了後、スタッフ教育を行いたい	0.82
がん看護専門看護師教育課程修了後、病棟配属となり活動したい	0.77
がん看護専門看護師教育課程修了後、専門外来を持ち活動したい	0.76
がん看護専門看護師教育課程修了後、解決困難な事例に取り組みたい	0.74
がん看護専門看護師教育課程修了後、倫理的課題に取り組みたい	0.67

19

第3因子「学業と就業を両立できる自己統制力」

▶項目数11, 因子負荷量0.74~0.41

項目	因子負荷量
大学院の授業が日勤後に出席できる夜間開講だと通学できる	0.74
大学院に進学するための時間的余裕がある	0.63
大学院の授業が休日開講だと通学できる	0.62
大学院の学費が賄える	0.59
仕事と学業を両立する自信がある	0.58
大学院の学費は自分にとって妥当である	0.52
大学院に進学した場合、勉強についていける自信がある	0.48
大学院に進学した場合、体調には自信がある	0.46
大学院への進学は家族に対しての後ろめたさを感じない	0.46
大学院へ進学する場合、休職しなくてよい	0.44
大学院へ進学する場合、現在の収入を維持できる	0.41

20

第4因子「教育過程への関心と課題遂行への高い意識」

▶項目数7, 因子負荷量0.85~0.46

項目	因子負荷量
がん看護専門看護師教育課程のカリキュラムを知っている	0.85
がん看護専門看護師教育課程修了後、取り組みたい研究テーマがある	0.76
がん看護専門看護師になるための日本看護系大学協議会が定める専門看護師教育課程での取得単位数が、総計26単位から38単位へ改正されたことを知っている	0.64
周囲からがん看護専門看護師の資格取得を期待されている	0.63
がん看護専門看護師教育課程に長期履修制度があることを知っている	0.59
専門看護師認定審査について知っている	0.53
がん看護専門看護師になって解決したい課題がある	0.46

21

第5因子「進学への安心と保障された雇用環境」

▶項目数5, 因子負荷量0.80~0.47

項目	因子負荷量
職場に大学院進学のための休暇が気兼ねなく申請できる	0.80
職場に大学院進学のための時短が気兼ねなく申請できる	0.73
職場の同僚から大学院進学についての理解が得られる	0.61
職場の上司から大学院進学についての理解が得られる	0.59
退職した場合、再就職が容易である	0.47

22

第6因子「がん看護専門看護師を目指すために必要な条件の熟知」

▶項目数4, 因子負荷量0.65~0.47

項目	因子負荷量
がん看護専門看護師になるためには、看護系大学院修士課程を修了する必要があることを知っている	0.65
がん看護専門看護師になるためには看護師実務経験が通算5年以上あり、うち3年間以上はがん看護分野の実務経験が必要であることを知っている	0.58
新たな認定看護師として認定されるために特定行為研修が必要であることを知っている	0.52
がん看護専門看護師を養成する大学院がどこにあるか知っている	0.47

23

第7因子「家族からの進学に対する理解と支援」

▶項目数4, 因子負荷量0.68~0.59

項目	因子負荷量
子どもの理解が得られにくいことで大学院への進学に困難さを感じる	0.67
配偶者からの理解が得られにくいことで大学院への進学に困難さを感じる	0.67
育児のために大学院への進学に困難さを感じる	0.64
家事の負担のために大学院への進学に困難さを感じる	0.59

24

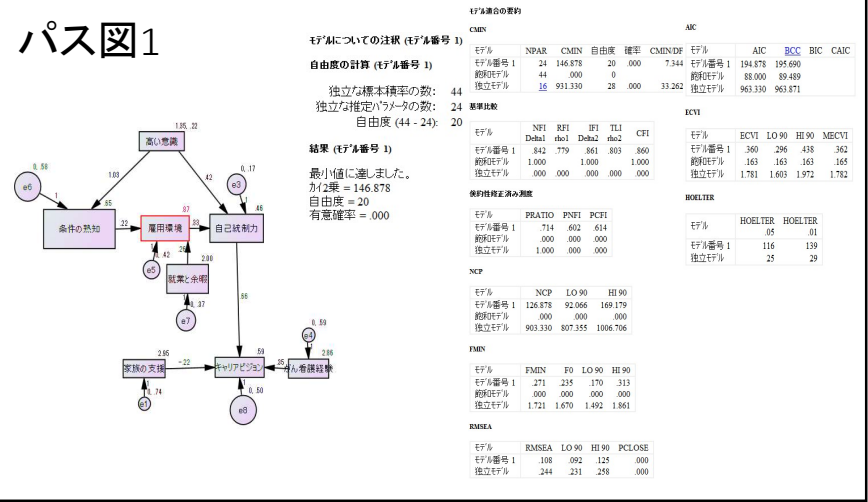
第8因子「バランスの取れた就業と余暇の担保」

項目数4, 因子負荷量0.63~0.43

項目	因子負荷量
自分に与えられている業務量は妥当である	0.63
超過勤務をすることはない	0.52
自部署の看護師の人数が足りている	0.49
有給休暇が希望どおりに取得できる	0.43

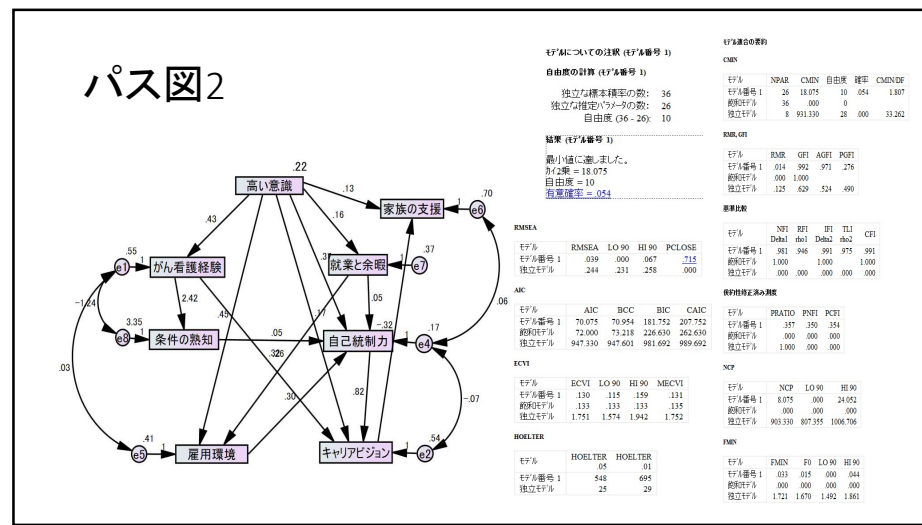
25

パス図1



26

パス図2



27

研究の限界と今後の課題

- ◆本調査は特定の地域で実施した調査で、医療体制や経済規模、がん看護専門看護師教育課程を有する大学院の有無などの地域特性が影響している可能性がある。今後は、複数の地域を対象に調査を行い、地域特性による要因の違いを明らかにし、その支援を検討する必要がある。
- ◆がん看護の経験を直接確認するための調査項目がなく副次的評価項目を用いた。がん看護の経験と要因の関係を直接確認するために、質問項目にがん看護の経験年数やその内容に関する項目を加えて、がん看護専門看護師教育課程への進学の関係を確認する必要がある。
- ◆文献検討から大学院への進学に関連すると思われる、家族の介護や仕事に対する姿勢などの項目は因子に含まれず、がん看護専門看護師教育課程への進学と一般的な看護系大学院への進学では背景が異なることが示唆された。これらの違いの原因を究明することがより具体的な支援となり得ることが考えられる。

28

参考文献

- 厚生省健康政策局看護課：看護制度検討会報告書：21世紀へむけての看護制度のあり方。第一法規出版、東京、1987。
- 福地本晴美、篠木絵里：特定機能病院の看護部門における 専門看護師・認定看護師の活用システム。東京医療保健大学紀要、11巻1号、15-24、2016。
- 辻本雄大、前田貴彦、立松生陽他：男性看護師のキャリアおよびキャリア志向に関する認識と実際。日本看護学会論文集：看護管理、44号、63-66、2014。
- 澤井信江、野島良子、田中小百合：看護学・保健大学院に対する既進学者のニーズ。滋賀医科大学看護学ジャーナル、2巻1号、3-11、2004。
- 中村伸枝、臼井いづみ、松田直正他：専門看護師として認定を受けていない専門看護師教育課程修了者の認定申請に向けたサポートニーズ。千葉看護学会会誌、17巻、1号17-24、2011。
- 芝祐順：因子分析法第2版、5-8、東京大学出版、東京都、1979。
- 清水和秋：Misuse and Artifact in Factor Analytic Research。関西大学社会学部紀要、49巻2号、191-211、2018。
- 吉田寿夫、石井秀宗、南風原朝和：研究委員会企画チュートリアルセミナー 尺度の作成・使用と妥当性の検討。教育心理学年報、51巻、213-217、2012。
- 中山綾子、中山登志子、舟島なをみ：中堅看護師の職業経験に関する研究-大学院進学に至った看護師に着目して-。看護教育学研究、23巻1号、49-64、2014。
- 真嶋朋子、楠潤子、渡邊美和他：専門看護師が必要とする看護管理者からの支援：組織文化からの一考察。文化看護学会誌、4巻1号、13-25、2012。
- 柿原加代子、大野晶子、東野啓子他：継続勤務している看護師のキャリアアップに関する認識。日本赤十字豊田看護大学紀要、7巻1号、153-159、2012。
- 小澤尚子、坂江千寿子、坂間伊津美他：看護職の大学院への進学ニーズに関する調査。茨城キリスト教大学看護学部紀要、1号、71-77、2009。
- 馬場薫、栗城尚之、内山繁樹他：病院の看護部門における専門看護師の導入方法と人材要件。北日本看護学会誌、21巻1号、57-63、2018。
- 藤本桂子、菊地沙織、神田清子他：看護師がキャリア発達のために抱く病院・大学院への期待に関する調査。群馬保健学紀要、36巻、39-47、2015。
- 林有学、米山京子：看護師におけるキャリア形成およびそれに影響を及ぼす要因。日本看護科学会誌、28巻1号、1-20、2008。
- 東沢弥貴、山田聡子、飯島佐知子他：愛知県立医科大学の教育改革に関する調査(4)-病院で働く看護師の本学大学院への進学ニーズ-。愛知県立看護大学紀要、11巻、95-107、2005。
- 松下年子、岡部恵子、天野雅美他：大学病院関連医療施設に就業する看護師の大学院修士課程入学への関心。日本看護研究学会雑誌、32巻4号、39-50、2009。
- 関谷陽子、大西和子、辻川真弓：がん看護専門看護師によるがん看護に携わる看護師への支援内容—看護師への面接調査から—。三重看護学誌、第14巻1号、41-53、2012。